

## カップを手にした男の子

### グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダによる再話

何世紀も前のある朝、後に聖アウグスティヌスとして知られるようになる男が、海岸沿いをさまよって歩いていた。彼は至上の真理を探究して、夜な夜な起きていました——考えながら、学びながら、推論しながら、祈りながら。そして、そうすることで、一体どこに到達することができたのでしょうか？ 彼は何を達成したのでしょうか？ 彼のまぶたは重く垂れていました。身体のすべての関節が痛みました。休むことさえできたらよかったです。

アウグスティヌスは真理を求めて、マインドの平和をすべて失っていました。彼は悟りをあまりに一生懸命追い求めていたので、もはや昼なのか夜なのか分からなくなっていたのです。教典、また教典、言葉、そしてさらに言葉、議論、教義、討論、信念、最高で最新の考え——彼の頭はこれらの考え事のあまりの重みに垂れ、はち切れそうでした。自分のマインドのそのような重みで、背中が曲がった人のように前かがみになっている彼を、人々はしばしば見掛けました。

早朝、彼は広大な海と空を見ながら浜辺を歩きました——探求し続けながら。しばらくすると、彼は小さな男の子がたった一人で立っているのを見掛けました。男の子はカップを手にして、海を見詰めていました。

アウグスティヌスが近づくと、その幼い男の子がとても悲しく寂しそうなことに気づきました。彼は孤独で物思いにふけているようでした。

アウグスティヌスは、この幼い男の子を助けたいという気持ちで自分がいっぱいになっていることに気づきました。「おお、坊や」と、男の子にさらに近づきながら言いました。「どうしたの？ どうしてそんなに悲しいのかい？ 君は何を考えているの？」

男の子が聖アウグスティヌスを見上げると、その目は静かな絶望でいっぱいでした。「僕は海全部を入れられるように、カップを持ってここに来たの」と言いました。「すごく長い間、ここで一生懸命やってみただけど、どうしてもうまくいかないの。どうしたらいいのか分からなくて。それがとても悲しいの」。アウグスティヌスは愛情を込めて男の子の肩に腕を回しました。「どうして理由もないのに、そんなに悲しむのかい？」と言いました。「海はとても大きいのに、君のカップはとても小さいんだよ。お聞き。私にもっと良い考えがあるよ。君のカップを海の中に投げ入れたらどうだろう。そうすれば、カップは海の一部になって、君の難題は解決するよ」

小さな男の子はこのアイデアがとても気に入りました。ほほ笑みが彼の顔にぱっと浮かびました。目をキラキラさせて、彼はカップをできるだけ遠くまで海に投げ入れました。

カップが空を飛び、きらめき波打つ青い海に消えると、アウグスティヌスは息をのみました。目を大きく見開きました。彼は、今自分が言った言葉を、心の中で繰り返しました。「君のカップを海の中に投げ入れたらどうだろう」。そして、それが自分が長い間抱えていた難題に対する答えであると気づいたのです。

彼の心は叫びました。「アウグスティヌス！ アウグスティヌス、おまえは分からないのか？ 大いなる意識の海全体を、おまえのエゴの小さなカップに入れようとして、入り切らないから嘆き悲しんできたのだ。そうではなく、至高の愛の海に、おまえのエゴを投げ入れるのだ、アウグスティヌス。おまえが探究している知識を入れるには、おまえのカップはあまりにも小さ過ぎる。海——マインドを超越した英知の海——にそれを投げ入れるんだ。そうすれば、おまえ自身が英知そのものになるのだ」

この知識が彼の内側に湧き上がると、アウグスティヌスは自由の身になった囚人のようでした。自分があまりに軽やかに感じられ、踊りたくなりました。彼が望めば、飛ぶこともできるとさえ確信していました。

彼の人生の重荷、暗闇の中で探究し続けた年月の重さは消え去りました。そして今、彼がどこを見ようと、そこには光がありました。それはきらめいていました。

アウグスティヌスが真理のビジョンを受けられると、その瞬間、彼は変容しました。彼が歩くと、彼の内側に新しい理解の波が押し寄せてきました——波が次々に押し寄せ、ますます彼の意欲をかき立てました。この時までずっと、彼は本に顔を埋め、教典の難解な言葉を解読しようとしていたのです。今、彼は顔を上げました。彼は世界に、神の世界に自分が開かれ、どこにでも神の知識があることを知りました。彼は砂の一粒一粒に対する愛情でいっぱいでした。宇宙の隅々が、彼に教典を歌っていました。宇宙の隅々が、神の称賛を歌っていたのです。

アウグスティヌスが浜辺を歩き続けると、実際、何千人もの少年や少女が、カップを手にして、大いなる意識の海の岸に立っていることに気づきました。そして一人一人が考えていました。「私は大きなカップを持っている。たくさんの海が入るだろう」。または、「私のカップは彼のより大きい。もっと多くの海が入るだろう」。「私のカップはとてもよく考えられて作られている。彼女のより早くいっぱいになるだろう」。「私のカップはとても美しい。海は魅了されて入らずにはいられないだろう」。彼らは皆、手放すことができないくらい魅了され、自分たちのエゴのカップをしっかりと握り締めていたのです。「私のカップは3世代にわたって受け継がれているんだ」。「私のカップは個性的だ」。「私のカップは完璧だ」。彼らは皆、それはそれは長い間、待ち続けていました。彼らは皆、一生懸命努力をしていたのです。しかし、彼らのカップは一つ残らず空っぽだったのです。

アウグスティヌスの心は叫びました。「おお、愛しい者たちよ、カップを海の中に投げ入れなさい。あなたたち自身を愛の中に溶け込ませなさい。カップを海に投げ入れるのです！」



© 2021 SYDA Foundation®. 著作権所有。